

ブラジルにおける日系新宗教の展開

渡辺 雅子

研究の目的

日本からブラジルに集団移民が初めて渡ったのは1908年のことで、それから90年以上が経過した。ブラジルは海外最大の日系人口（約130万人、ブラジル人口の1%弱）をもつ国である。戦前にはカトリック教国ブラジルへの宗教家の渡航を日本政府が取り締まったため、正式布教は戦後になるが、現在では多くの新宗教が進出している。いずれもまず日系人を対象として布教した後、日系のエスニック・グループを超えて非日系人に浸透したものと、日系の枠を超えられなかったものがある。本論文では、主要新宗教として、大本、金光教、立正佼成会、世界救世教、創価学会、霊友会、稲荷会を取り上げ、これらの新宗教がブラジル社会でどのように展開したかを事例研究的に明らかにするとともに、とくに非日系人布教の成否に着目して、異文化布教の展開を左右した要因と異文化布教に伴う課題解決のありかたを考察する。

研究の方法

ブラジルの日系新宗教にかんする先行研究は乏しく、かつ現地でも文書資料は整備されていなかったため、著者自身が1988年以降1999年まで計6回、のべ300日間ブラジルで実施した聞き取り調査、および日本で関連して行った調査から得た資料をもとにしている。

論文の構成

～部から構成される。部ブラジルの日系人・宗教文化・日系宗教では、部～部で扱う個別新宗教の展開の背景を説述する。ブラジルの日系新宗教は信徒が日系人主体のものと非日系人に拡大したものとに大別できるので、部では日系人主体の大本(3章)、金光教(4章)、立正佼成会(5章)を、部では非日系人に布教を拡大した世界救世教(6章)、創価学会(7章)、霊友会(8章)を考察する。部(9章)では、ブラジル宗教文化の一側面を鮮明に表しているブラジル生まれの日系新宗教の稲荷会をとりあげる。

各章の概要

部1章では、日本移民の歴史、日系社会の組織、日系人の実態を概観し、さらに、日系社会や日系新宗教に大きな影響を与えた1980年代後半からの日本へのデカセギについて述べる。2章では、新宗教のみならず仏教・神道も含めた日系宗教の戦前・戦後にわたる展開を概観し、さらに布教にあたって直面するブラジルの宗教文化、すなわちカトリック教、インディオの宗教、黒人の部族宗教が習合し、それにフランス起源の心霊主義が混

淆した、奇跡信仰・憑霊信仰を特徴とするブラジルの宗教文化について述べる。

部 3 章--大本（布教開始 1926 年・信徒 240 世帯・非日系人 5%）は、1930 年代と 1950 年代後半から 1960 年代の祈禱的活動が活発だった時には、現世利益を求める非日系人をひきつけたが、流動的な彼らを定着させることができず、現状では日系人主体の宗教と化している。さらに、日本の本部方針による祭式の強調が儀礼の異質性を増幅させ、参詣宗教化が顕著となり、日系人のエスニック・チャーチとなって、閉じた空間を形づくっている。

4 章--金光教（布教開始 1964 年・信徒 400 人・非日系人 10%）は、布教年代が最も早く有力なピリグイ教会で代表させた。この教会はサンパウロ州内陸部の日系社会が強固な地域にあったため、エスニック・チャーチを求める日系人と、奇跡を求めて接近する非日系人とのせめぎ合いに特徴がある。祈禱的活動で非日系人が多くかかわったことが日系人信徒の離反を招き、日系人と非日系人の祭典を別にするなどの棲み分けをへて、冠婚葬祭執行のニーズのもとに日系社会のエスニック・チャーチとなっている。また、1970 年代後半に日本から後継教会長を招いたところ、その出身教会が金光教では異端とされる教会だったため、初代教会長家族、近隣教会、本部との間に葛藤を生み、解決までに時間がかかったが、そのことが教会長の宗教者としての自己形成に深くかかわった。

5 章--立正佼成会（布教開始 1971 年・信徒 657 世帯・非日系人 12%）は、1980 年代までは戦後移民の心のふるさとのエスニック・チャーチだった。しかし、1990 年代に入って、教会長の交代、世代交代の課題、日系人布教の行き詰まり、デカセギによる信徒の流出により、非日系人布教を視野に入れた転換が求められた。まだ模索的な段階であるが、無料喘息治療によって非日系人に教会を開き、喘息先祖供養の開始、ポルトガル語法座の開設、青年部活動の活発化などで、非日系人布教の方向性が打ち出されている。

部 6 章--世界救世教（布教開始 1955 年・信徒 31 万人・非日系人 97%）は、非日系人布教によって大きく伸張した。ブラジルの宗教文化に適合的な浄霊という宗教財は、信徒になれば誰でもできる簡便性に特徴がある。これによって初期から非日系人に布教したが、1970 年代後半にブラジル人気質を組み入れた非日系人布教のノウハウを確立して、教勢を拡大した。さらに 1990 年代に入って、ブラジル聖地の建設に向けて献金活動を強化し継続させるために、信徒の定着・育成の課題に取り組み、組織を改変するとともに、個人指導を通して御利益信仰から脱皮させ、浄霊の意味を拡張して自己変革へ導いた。救世教は浄霊を手だてとした奇跡信仰への対応から進んで、異文化布教の課題にこたえて流動的な信徒の定着・育成に成果を挙げ、都市の新中産階級をとらえた。

7 章--創価学会（布教開始 1960 年・信徒 15 万人・非日系人 90%）は、1960 年に池田大作（現、名誉会長）の訪伯を期に日本で入信した戦後移民を基盤として支部を結成した。

強烈な折伏活動による日系社会との摩擦、日本での政治進出に対するブラジル社会からの危険視、創価学会と日蓮正宗の二重構造による対立関係、によって展開が規定されつつ、各時期に生じた問題を乗り越えるために意識的に戦略をたて、方向を転換していったことに特徴がある。すなわち、日系社会との摩擦回避のために非日系人布教へ転換し、ブラジル社会の認知を獲得すべく折伏から文化活動の重視に方針を転換した。創価学会は日系新宗教のなかでは唯一入信に際してこれまでの宗教からの離脱を求めるが、カトリック教会に対しては柔軟路線をとる。非日系人布教では現証を重視し、異質性はあるにしても単純明快な実践に動機づける。また、座談会・個人指導・家庭訪問といった指導システム、役職への登用、文化活動を通じての育成によって、流動的な信徒の定着を図っている。

8章--霊友会（布教開始 1975 年・信徒 8 万人・非日系人 60%）は、支部の連合体からなる組織で支部の独立性が高い。はじめ日系人を主体に布教していたが、1990 年以降デカセギによって組織が打撃を受けたのを契機に、非日系人布教に大きく転回した。非日系人布教の先駆的支部では、儀礼の異質性は高いが、先祖供養と根性直しというブラジル文化に異質な内容を非日系人に理解しやすいように具体的に説き、世話をする・されるという実践をとおして信徒を定着させた。

部 9 章--稲荷会は日本に本部がある新宗教と異なり、伏見稲荷・石切神社・柳谷観音の系譜をひく霊能者によって、ブラジルで創始されたものである。霊能によって不幸の原因を見定め、それを除祓する活動をしているが、説明原理はブラジルの宗教要素を取り入れており、また日本の神々が中心でありながら、実際の活動はブラジルのエスピリティズム（心霊主義）と類似している。ここでは、日系新宗教が多かれ少なかれ直面するブラジルの宗教文化の一側面が具体的に描き出される。

総括

本論文でとりあげた新宗教は、日本にルーツをもつという一点では共通しているが、組織形態、布教形態、布教開始時期、拠点地の戦略的意義が異なり、母教団から引き継いだ教義・シンボル・実践といった宗教財が違い、日本の本部との関係もさまざまである。

組織形態（おやこ型 中央集権型）の軸と布教形態（教師中心参詣型 信徒中心万人布教者型）の軸で日系新宗教を分類すると、非日系人に拡大した新宗教は中央集権型・信徒中心万人布教者型宗教に集中している。万人布教者型が布教拡大を可能にするのは、救済要件として信徒を布教に動機づけるからである。日系人のパイの大きさは限られているため、拡大する限りは非日系人布教へ重点が移行するのは必然である。中央集権型が布教に機能的なのは、ブラジルは日本の 23 倍の面積がある広大な国なので、地域のヨコのとりまとめによる速やかな情報伝達と各種資源の適正配置が可能になるからである。

日系新宗教がブラジルという異文化社会で非日系人に布教を拡大していくには、適応課

題群、定着課題群、組織課題群を解決しなければならない。適応課題群は、言語の壁の克服が前提であって、ブラジルの奇跡信仰・憑霊信仰への対応、教義・儀礼・実践の異質性の稀釈、社会的認知の獲得、カトリック教会との摩擦の回避など、自らの宗教的アイデンティティを保持しつつ、ブラジルという異文化社会に適応していく課題である。

ブラジルの奇跡信仰に対応することは、非日系人布教にあたって重要だが、現世利益を求めて来る彼らをいかに定着させるかという課題が生じる。指示されることを嫌い、即効性を求め、神父や霊媒に拜んでもらって問題解決することに慣れ、宗教的に受け身で、自分の内部に原因を求める心が薄い、というブラジル人氣質を把握したうえで、文化的に異質な「自分で実践する」ことへ動機づける。さらに御利益信仰から自己変革に取り組みさせる。これにあたっては筋道だった言説で納得させるとともに、小集団活動や具体的な問題に即しての個人指導など、きめこまかな「世話」が必要である。非日系人は効果を求めて流動化しやすいので、定着課題群の解決は重要課題である。

資格授与システムの整備、現地人の役職への登用は、定着課題群とも関連する組織課題群である。広域組織化、拠点施設の建設は信徒数の増加に伴って必要とされる。ただし、異文化に進出した日系新宗教は、展開過程で生じた課題解決ばかりでなく、日本の本部との関係も無視することはできない。その人的・財的支援によって人材が派遣され、拠点施設を整えて、展開が促進されることがある一方、本部に派閥抗争がある場合、調整課題を抱え、それが展開の方向に影響を与えることがある。日系人主体の新宗教はブラジルの日系社会の一部には適応しても、本来の異文化布教に伴う諸課題に効果的に対処するに至っていない。

最後に述べておきたいのは、日系新宗教が 1990 年代に日本へのデカセギ現象で大きく揺らいだことである。布教組織に非日系人の登用が進んでいた救世教を別として、非日系人が多数を占める創価学会でも、組織の中枢を日系人で固めていたために打撃を受けた。日系人が主体だった霊友会ではデカセギの打撃のもとに急速に非日系人布教に向けて展開し、佼成会も非日系人布教に踏み切るに至った。地域社会と関係の深い金光教はデカセギ幹旋業務にかかわることで本部との問題が生じ、大本は日本の大本信徒によるデカセギ人材確保のための説明会などで巻き込まれた。いずれにしてもデカセギは日系新宗教のすべてに影響を及ぼし、とくに日系人主体の新宗教には非日系人布教に乗り出す大きな転機となった。